「義人は信仰によって生きる」ヘブル１０：３７－１１：２　　１８・１１・１１

Ⅰ　主の再臨、主の時を待望する信仰。１０：３７－３９

１．「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。遅れることはない」：３７。

３６節まで、試練の中でも忍耐するように、励まされて来た。

苦しみの中にあるキリスト者にとって、最大の希望は、主の再臨と、地上での忍耐の末の主の介入である。

主の再臨、介入を待つ態度の中に、その人の真の姿が現れる。

①ある人は、どうせ主が来られるのだからと、地上での仕事、社会的責任を怠けてしまう。

これは正しくない→Ⅰテサ４：１１、Ⅱテサ３：１０。

主は、世の終わり、再臨の時に、伝道と同時に、神からのタラントをどう用いたか、社会的責任も良くやったかどうかを評価して下さる。

②また、ある人は逆に、どうせ、主の再臨なんか、遅いんだ、ないかもしれない。死後の天国、さばきもない。ただ、地上の生活がすべてだ。未来は、どうでもいい。地位やお金がすべてだ。飲んで悪い事をして楽しもう。貧しい人、困っている人、迫害されている人の事なんかどうでもいい。礼拝や聖書を読む時間は、もったいない。この世の出世と物がすべてだ。

この態度は、地上でも真の幸いを味わえず、主の時が来た時、必ず後悔する。そして、その時は、もう遅い。（ルカ１２：４５－４７、マタイ２４：５１）。

主の再臨を正しく待つ人は、地上での主が与えられた仕事にも忠実で、社会的責任を喜んで果たす。と同時に、地上での生活がすべてではないと知っているので、主の恵みに感謝しつつ、地上での生活、伝道と人々への愛の奉仕、主から与えられた務めを果たしながら、主を待つ。一日一日を大切にしながら。

２．「わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない」：３８。

困難な中でも恐れ退く事から守ってくれる主への信仰、信頼。

私達は、皆、弱さを持っている。しかし、義人＝主を信じて罪が赦され義と認められた人は、この地上を「主への信仰、信頼」（信仰の原語＝信頼）（主への信頼関係）によって生きる。

つまり、私達は、弱くても、力強い主が、いつも共に歩んで下さる事実を信じ、主を信頼して乗り越えていく。弱くても、この主を信頼して歩める人生は素晴らしい！何億円出されても、この主への信仰、信頼と取り換える事は出来ない。

聖書的な信仰とは、素晴らしいイエス御自身をいただいているという最高の恵みである！

３．「しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です」：３９。

困難な中で恐れ退き、主への信仰を捨て、滅んでいく道がある。

しかし、私達は、主を信じ、主を信頼し拠り頼み続けて、永遠の命（神と共に永遠に生きる命）、神の祝福を保つ者でありたい。主の御助けに拠り頼みつつ。

Ⅱ　望んでいる事柄を保証し、目に見えないものを確信させる信仰。１１：１

ヘブルの著者は、忍耐の励ましの為に信仰の素晴らしさを述べていく。１１章全体。

１．「信仰は、望んでいることを保証し」１１：１。

この保証と訳された原語には、「支柱、土台、実体、本質、ヘブル１：３、確信、３：１４、Ⅱコリ９：４」という意味がある。

つまり、神の約束の御言葉を信頼する信仰は、人間、自分の経験においては、まだ未来の事柄を、今の現実、実体、本質のものとして生きる力を与える。

本物の信仰は、待ち望んでいる恵みを必ず得ると「確信」して疑わない。

聖書的な本物の信仰（思い込みでなく、本当の命を与えてくれるもの）には、二つの条件がある。

①「何を」信じるかが大切。

信仰の対象は、何でも（きつね、たぬき、へび、天体、人間、偶像、お金、地位、名誉）良いわけではない。恐ろしいのは、人は、その人が信仰している対象に似て行き、その奴隷となって行く。

本物の神、キリストを信頼している人の信仰は本物、実体と保証付きのものである。

なぜなら、その人の「信仰心」が完全であるというのではなく、その人の信じている対象＝三位一体の神ご自身が完全で本物のお方であるから。

また、神を信じるとは、その方の御言葉、聖書を信じる事。そしてその御言葉は、必ず実現するので、それを信じる信仰も保証となる。

②「望んでいること」が、神の御心にかなっているという条件（Ⅰヨハネ５：１４）。

悪いわがままな望みが、いつも実現するわけではない。

しかし、望んでいることが、みこころにかなうなら信じ続けよう。主の時に、それは答えられ実現する。

２．信仰とは、「目に見えないもの（神、神の救い）を確信させるもの」。

目に見える事は、人々に確信を与える。

しかし、本物の信仰は、目に見えない事柄（神の存在、神のご支配、神の救い）を心の目で人に見せる。

信仰の目で、神の世界が見える。

信仰の対象は、霊的で永遠的な神に関するものと、未来における約束の実現を待ち望むという面でも「目に見えないもの」。

信仰の対象は、この世界の目に見える物ではない。ふと考えてみると本当に不思議である。

「物質やお金、目に見えるものがすべてだ」という価値観のこの世にあって、「目に見えない世界、神」を本気で信じているキリスト者が何億人といるのだ！

そして、目に見えるものしか信じないと思っていた私達も、その仲間に入れてもらっている！

何と光栄なことか。

この信仰こそ神の業、奇蹟である。

疑い深く目に見えるものしか信じない私達が、本気で目に見えない神を信じているのである。

自分で信じたように思えても、実は神が心の目を開き、信じさせて下さったのである（ヨハネ１５：１６、マタイ１６：１７、「尊い信仰を受けた方々へ」Ⅱペテロ１：１、Ⅰコリ１２：３）。

※私達が悩み沈んでいる時は、目に見える状況だけに目を奪われている時である。しかし、そんな中でも、信仰者には不思議な事が起こる。困難な状況は少しも変わっていないのに、心と信仰の目で、すべてを支配し益として下さる神を見つめる時、大きな慰め、平安、励ましをいただく。

「あっそうか！この困難な中でも、主は私のすぐそばにおられるのだ。すべての事を支配して下さっているのだ。私の悩み、重荷を理解して下さっているのだ。すべてを益（試練を通しての主の御姿への成長、神のご計画の前進）にして下さるのだ」と。

Ⅲ「昔の人たちは、この信仰によって称賛されました」：２。

信仰とは何かを知る良い方法は、信仰に生きた人々の生涯を知る事である。

その為に、神は聖書に多くの人々の生涯を記しておられる。

「これらの人々は、この世が『偉大な経歴』と呼ぶ成功を退け、この世が『無難な選択』と呼ぶ安全を拒み、すべてを神に懸けた」。

神は、困難な中でも神を信頼して生きる「信仰」を最も喜び称賛（その信仰は本物だと認めて下さる）して下さる。